

---

# 地平線に浮かぶ月

風魅 蒼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地平線に浮かぶ月

### 【Nコード】

N4874I

### 【作者名】

風魅 蒼

### 【あらすじ】

目が覚めたら、そこには見覚えのない場所でただひとり、見覚えのない《軍服》をきたじぶんがたっていた。

目の前に突如現れた一人の少女。  
やさしく微笑んでくれる彼女に、どうしようもない恐怖を覚えずにはいられない。

自分の知らない日常に取り残されたわたしは、なにをおもっ  
？

## おわりのはじまり（前書き）

目が覚めたら、そこには見覚えのない場所であたりひとり、見覚えのない《軍服》をきたじぶんがたっていた。

目の前に突如現れた一人の少女。

やさしく微笑んでくれる彼女に、どうしようもない恐怖を覚えずにはられない。

自分の知らない日常に取り残されたわたしは、なにをおもっ  
？

## おわりのはじまり

別に、約束をしていたわけじゃない。

縛っていたつもりも、

縛られていたつもりも なかったんだ。

いつから『絶対』なんて不吉なコトバを 信じるようになった？

お互いがお互いを必要としている、そう 信じてた。

信じていると 信じていてくれると。

お互いだけを 信じてられるんだと

ただそうとだけ 確信していたんだ。

漠然と生まれる 焦燥 疑惑 不安 の たね。

それに眼を向けるのが怖くて、眼を塞いだんだ。

見ないように。

気付かないように。

どうしてそんなことをしたんだろう？

眼を背けてさえないなければ 耳を傾けてさえいられたら

ここまで胸が痛むことも なかったかもしれない。

あんな言葉 言われる事など有り得無いと 信じなければ よか  
ったんだ。

ワタシガキエテイタナラ キエルコトガデキタナラ ヨカッタナダ。

「ここは・・・？」

眩けば響く、そこは夜の不毛の砂漠。

夜の砂漠は温度の変化が激しいと聞く。

それでも、今自分が立っているという現状以外に、特に変化はない。寒く、ない。

見ず知らずの風景に、思わず背筋が凍るような錯覚を覚えた。

自分には夢遊病などというものは無い。聞いたこともない。

近所にこんな砂漠があるなんて有り得ないことであるし、出かけた覚えこそないのだ。

自分の周りは、まるで絵画を切り取ったかのような、静粛でいまいち現実味のない風景。

絵画としてならばなんの異常もないという、決定的な”己”という異常性。

一人だけ取り残されたような、そんな、孤独。

「なんなのさ、これは・・・」

零れ落ちた声が震えているのがハッキリとわかる。理由など簡単なこと。

のだ。

自分以外にそこを動くモノがない

本来あるはずの音も。

世界に存在するはずの時間でさ

えも。

砂も 水も 雲も 光も 風

も

ただそこに在るだけで、静止したまま、

なにもしない。

わたしの着ている服も信じられないことに蒼の軍服。

手に持っているのは 一本のダガー。ただ、それだけ。

そこに在るだけで なにもしてはくれない。

教えてはくれない。導いてはくれない。

わからない。 なんなんだ コレは。

「 いい加減にその、何かに期待する癖、直しなさいよ」

呆れたような、静かだけれども、自分にとって耳障りに近い声が響く。 自分の後ろから。

勢いよく振り返れば、そこにいたのは困ったような表情を浮かべ、黒と白を基調とした、豪華とも質素ともとれる、なんとも上品な服を着ている、可愛らしい自分とそう変わらない年月らしい、少女だった。

「っ……っ……」

わからない思いに貫かれた身体は、思わず後退した。  
わからない思いを抱えている自分が、とてつもなく怖い。  
まるで、おそろしいバケモノを自分の中に飼っているような、そんな 感覚。

何故だろう？

駆け寄って彼女をこの腕で抱きしめて。安心させてあげたいと思う。彼女に、手にあるダガーを突き立てて。思い知らされる前に消したいと思う。

「だめよ。」

深淵にはまって落ちていくような感情に吞まれかけた私を覚醒させたのは、その目の前に居る彼女の放ったたった一言だった。

「自分にとって不可解なものを、無理に理解しようとしては駄目よ。壊れてしまう。貴女は強くも弱くもない、とても不安定なもの。」

それは誰よりも、貴女自身が知っている事でしょう？」

その声を聞いた途端に、私の肩が大きく跳ねる。

恐れからか、驚きからか。

自分の事であるはずなのに、それらは何一つ納得も理解も出来ないものだったけれど。そんな私の様子を見て、少女は哀しそうに瞳を伏せた。

「……ごめんなさい。貴女を怖がらせることはわかってたの。でも、わからないという事実を、貴女は何よりも受け入れられないと

思ったから。・・・出すぎた真似をしてしまったようね」

いつもはすぐに起動するはずの自分の頭も、この時ばかりは動揺が大きすぎるせいか動かない。それでも、変化した現実、目の前にカタチとして現れてくれた。

独りきりの世界のナカで、わたしでない　　が、居てくれている。

彼女がいるという事実が、この世界を動かした。

「　風が・・・。」

それは、わたしと彼女のどちらがこぼしたことばだったろう。

私と彼女の間に、風が舞う。砂漠の砂が、風によって地面を滑る。砂と砂がぶつかり合って、静かに音が響く。有り得ないことに、水が風と一緒に宙を舞っている。

無くなっていた音も、時間も、一人によってこつとも簡単に動き出した。

その水を私が呆然と見つめた後に、こちらの視線に気付いた彼女は嬉しそうに笑う。

私はまだ、止まった頭を元に戻すことに一生懸命なのだけけど、彼女の微笑みが安らぎを運んでくれたのを自覚して、我ながら単純だなあと微苦笑を溢してみたり。

「・・・よかった。拒絶しないでいてくれたのね」

「　あ　　あなた、は」



緊張のせいであろう震える声が一言目に。その声は自分が想定していた元来の声音よりも、はるかに弱弱しく、また情けない声音だった。深く息を吸い、強張った体に鞭打って、先程よりかは幾分はつきりとした声を無理やりに出す。

そんな私を知ってか知らずか、彼女はクルリと私と反対の後ろを向いて、水と風とを片手に、静かに小さくそれらを掻き回し、その残留を見ながら話し出す。

「わたし・・・いいえ。何でもないわ」

自然とこちらに向き直る視線を受け止めながらも、私は気恥ずかしさのためにその視線を出来うる限り流した。

故に。考える様な間を作っていたときの、彼女がどこを見ていたのかという事実は、永久に誰かが知ることはなくなった。

「あたしの名前は、ユエ。貴女の知識だと、月という意味を持つわ」

貴女は？

彼女はわたしを見つめながらそう和やかに聞いてきて、私は安堵の吐息を漏らす。

何故？

まるで、彼女が違う事を話さなかったという事に、過剰に反応したような？

「人の話ぐらい聞いてほしいのだけねど」

呆れたような、怒ったような、低いような、高いような。そんな声で、私は彼女に呼ばれた。

はっとして自然と何処かに飛んでいた意識を浮上させる。彼女はやっぱりというかなんというか、怒っているような、いわゆるふくれ顔という表現がピッタリの様子でこちらに視線を送っていた。

「あ、わ、私は・・・綾乃あやの——巴とまへ——」

思わず、本当に無意識に本名を答えてしまった自分に驚く。

まさか、嘘だろう。

私が、見ず知らずの他人に、名前、を、教えてしまった、なんて。

こんなのは、何かの冗談だ。

「そう。巴。貴女は歌が好きなのでしょう？今すぐに歌いなさい」

神様は軽い現実逃避さえも私に許してはくれないらしい。理解不能な現実に、解析不明な彼女の言動。

「はあ？」

何様。そんな単語が頭の中枢を握りこんで離さない。ついでにいうと、たった今自己紹介をした初対面の人間に、知らない場所で、しかも呼び捨てで命令できる彼女を睥睨したりもした。致し方ないことなのだと、頭の片隅で自身を慰めながら。

私自身の返答など知ったことか、などと言いそうな表情で、彼女

ユエは地面の砂の上に座り込んで、私を見上げてくる。

なんだか、勝手に歌うと決め付けられてしまった。

否、命令している時点で、このお嬢様（見た目だが）にとって私に拒否権なんてないんだろぅが。

「早く歌いなさいよ。ほら。早く」

「……いじめっ子。」

ぽつりと呟けば、ユエはニッコリとしながら体を乗り上げ、私を見上げてくる。

「なにかしら？」

「いえ。なんでも」

なまはげを前に泣き叫ぶ子供（私自身も幼い頃に経験したが）というのも、こんな感じだったろうかなどと思いつつながら即効で答えれば、またユエは笑う。

似ているではないか。「わるいこいねがー」と言っていないけれども。

あのなまはげの仮面を被ったときに自然発生する威圧感がこれまた絶妙なまでに。

ひょっとしなくとも、なまはげよりも効果は抜群だと思われる。

そんなふざけた思考を止めたのは、他でもないユエ自身で。

「歌ってくれなきゃ、ここが何処なのか、教えないわよ」

そのユエの笑顔は、今までと変わらない表情のまま私に言い放たれた言葉だった。

でも、あまりにも、ちがいすぎる。  
変わらないけれど、あまりにもちがう。

彼女のその微笑は、私に一抹の不安を胸に刻ませた。

「  
夜叉やしゃが詠うたうは 血潮ちしほの宴うたげ  
誰たが為ために流るるは 瑠璃るりの色

無味無臭むみむしゅうの深淵しんえんにて  
生まれ出うまれいずるは 慈悲じひの命いのち

淵源えんげんを辿たどるべき時ときは  
己おのれを殺ころすべき時ときなのか

問くもんいかけは愚問ぐもん

全すべては我が心ねがいの為  
いずれ来きたるべき黄泉よみの門前もんぜん  
その軀むくろに刻きざみしは死たひだちの傷跡きせき

憎にくしみの焰ほむらに焼いたかれし我が心ねがい  
願そのまきいしはただ命みことの幸あゆを

私が歌い終わっても、ユエは瞳を開こうとはしなかった。  
その姿は、眠っている様にも、余韻に浸ってくれているようにもみえる。

私もなんだか、話す気にはとてもなれなくて ただ黙ってその沈黙を聴いていた。

「・・・きれいな歌」

出し抜けのように唐突に響いた静かなユエの声は、とても、安心できて。

だからこそ 怖かった。

わたしは風に舞う水を自分の手でかき混ぜて、気を紛らわす。  
一瞬の恐怖は、跡形もなく消し去って。

「・・・いい唄だわ。」

「……………あり、がとう」

ユエはよくわからない。いきなり命令してきて、いきなり褒めてくれて。

その賞賛だつて、きっと社交辞令だと思つのに、なんだか私自身はそう思つてはくれないようだ。この顔に集まっている熱が、きっとその証拠。

「約束だつたわね。」

そう言つて立ち上がつて、こちらに体をむけるユエ。

「ここが何処なのかは」

お互いに視線を合わせて、私は次の彼女の言葉を待った。

「……………まあ、気が向いたときにでも話すわ。」

「……………」

「……………」

「はあ!?!?」

沈黙の中、顔を見つめあう。  
次の瞬間に、笑ってしまった。ユエも、わたしも。

「まるで、長年の付き合いである友人同士のように。」  
「……………」

「ホラ。日が昇る。大丈夫。きっとすぐにまた会えるから」

どの位経ったのか砂漠の地平線の向こうから、太陽が昇ってくるのがわかる。  
それを眺めていたら、ユエはそう言った。

「うそつきに言われてもナー」

ほんの少しの、軽い気持ちで、そう私はおどけてみせた。

「あら？コレは元々、貴女のものよ？」

そう言った彼女の　ユエのその言葉は、私の中の何かを、





おちていく。

おちていく。

まっさかさまに。

まっさかさまに。

そこにいていこうはひつようとなねず、  
またていこうといういみすらあらず、

ただがむしやらに、

けっしてうごけないからだのかわりに、

けっしてうごかないところのなかで、

せいっぱいのていこうをしながら

おちていく。

いわねていく。

きしむおとがする。



## おわりのはじまり（後書き）

お初の小説です。

拙いながらも頑張りたいと思っておりますので、どうか生暖かく見守ってやってください。。。。

## 質問

「私は、どうしていつもここに来ると軍服を着ているの？」

初めてユエと出遭って（？）から、もう随分な月日が流れた。どうやら此処は、わたしの夢、みたいなものの中らしい。

確証があるわけではないけれど、なんとなくそういう感じが わたしには感じられるのだ。

まあ、わたしが『目覚め』という表現をしている行動が発生した後は、普通に元いた場所に戻るから、何も害などない。よって、気にすることでもない。

この砂漠から、あのコンクリート固めの都会に行くときは、何故だか疎外感のようなものが必ずある。

まるで、暖かい部屋の中から、極寒の外気に身をさらしたような寒々しさ。

ユエはいつも意地悪だが、気が向けばきちんと質問に答えてくれる。

あくまでも 気が向けば、の話だが。

「あなた自身が、その意味を気にして意識してるからじゃない？」

「私が？・・・軍人になりたいなんて考えたこともないけど」

ユエの言葉のひとつひとつは、いつも曖昧で一見するとわかりづら。

それでも、私にとって、その全てがとても大切な意味を持っている気がする。

「そういう意味じゃない。軍人は貴女にとって一番身近でわかりやすい【破壊】の象徴よ。」

「軍人が、ね……」

「もちろん他にも色々あるわよ。というか貴女の場合、全ての人間に当てはまるんだもの。そのうちのひとつは、貴女のタブーだしね」

ユエは、私のことを知っているんだろうか。

いつも同じで明確な答えを導き出す。

明らかな意志を持って、動き回る。

どうして、彼女がアレに似ていると感じるんだろう

「アナタの心はだれのもの？」

そう 全ては万物のひとしずつ

「

いつものように始まって、いつものように終わる  
それが当たり前。

そこに生まれるモノは、いかなモノであろうとも、一時の儂い幻想でしかない。

すこし経てば、それは消え去ってしまう。

「あなたは わたし

わたしは あなた

同じ おなじ 皆は全てひとつのもの

皆は同じハズなのに

気付けば みんな 気付かない

離れていくというコトを

言わなくても私も彼女も理解している。

軍人が、わかりやすい【破壊】の象徴ならば

「 同じ おなじ 皆は全てひとつのもの

全ては同じはずなのに

似ている喜びはあって 同じ悲しみは消え去った

だれもが 同じでは なくなった

私はずっと め を そむけていたかった。

度々 彼女がアレと被るのも、私がおかしいほどに不安定なもの

「 魂を 散りばめて

《全て》は《ひとつ》となった

もう だれもわたしではない

もう だれもあなたではない

私がわたしで在るということ それは【孤独】ともいう

私の手には、いつも必ずダガーがあった。

蒼いこの軍服が、私は今も大嫌いだ。

彼女はいつも、好き勝手行動していた。

ユエはいつも、わたしのことを知っていた。

思えば　ここがどこなのかも

ユエが　だれなのかも

はじめから　知っていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4874i/>

---

地平線に浮かぶ月

2010年10月28日04時46分発行